

# 都市景観の保存と文化の継承及び 発揚によるまちづくりの研究調査

—— 台湾の淡水鎮及び大溪鎮の事例 ——

奥 野 志 偉

## 要 約

都市景観保存・文化の継承発揚と住民参加の関連について台湾の2事例に焦点を当ててみた。

(1) 台北県淡水鎮は、台北市大都市圏の発展に取込まれ、民間住宅開発、淡水河辺観光開発、郊外ニュータウン開発といったような道を辿ってきた。内政部管建署が計画人口30万人の淡海ニュータウン建設を始めた。が、ボランティア団体の滬尾文史工作室及び建築士・プランナー専門家は、開発に対して疑問視している。淡江大学建築学部のスタッフを中心とするプランナーグループは、淡水コミュニティ工作室と組んで、台北県淡水鎮所の委託を受け、1993年に淡水河岸遊憩計画案に着手し、住民、児童、婦女の参加を取入れながら、18カ月をかけて完成した。計画案は、淡水河辺に、自転車専用道路の新設を主軸として旧市街地の文化景観保存及び再開発、廟前市場の改造と景観の改善、水上スポーツや観光活動やフェリー埠頭の施設、埠頭前便所の建替え、生態環境の整備とエコツーリズムのすすめ、MRT淡水駅前広場やスペースの空間設計、中仏記念公園の整備等の多様な内容を含めた案を提示した。観光レクリエーション計画だけだったものが、地元生活者のニーズにこたえうる都市施設の整備や交通の改善を含めている保存・開発の両立のまちづくりへと提案された。

(2) 桃園県大溪鎮は、若年人口流失の問題を抱えていた。現在、同まちは台湾における官・民・学の3者が手を組んで文化によるまちづくりへ寄与したモデルである。最初、「大溪の宝物」「大溪の美しいもの」といった投票互選を通して広い住民の参加（ビジターも参加可能）や、まち愛着意識の高揚の潮を起こした。現在、店看板の美化と統一化、ファサードの保存及び美化事業が行われ、まちの歴史・文化・産業の総合的なまちづくりへと出発したところである。以前、旧市街地である和平路の住民・商店（家具、木器具、漆器具、鉄工、干し豆腐など）だけが活躍していたが、現在隣接している中山路の住民・商店（画廊、工芸工房）も、文芸区づくりといった新しいテーマをあげて協力し、多目的の観光地域開発及び文化創造へと一歩進んでいる。まちづくりのプロセスのなかでは、エンジンの役割を果たしたボランティア団体が多数誕生され、「文化立鎮」によって住民のまちに対する愛着意識がさらに高揚していることが考察でわかった。

キーワード：淡水、大溪、まちづくり、コミュニティ開発、住民参加、自転車専用道、レクリエーション計画、文化振興

大阪を中心とするインターシティ研究会<sup>1)</sup>の7人のメンバー<sup>2)</sup>が、台湾における「都心居住」および「都市景観の保存とコミュニティ運動」の近況を調査するため、1999年5月12日に関西国際空港より台湾中正空港に向かって出発した。以下、都市景観の保存とコミュニティ運動のテーマを優先して、台北県淡水鎮と桃園県大溪鎮の2事例を中心に、ヒアリングの情報及び文献資料を活用しながら研究調査の結果をまとめた。

### I 台北県淡水鎮 —— 歴史的都市景観の保存及びまちの再生 ——

訪問先	滬尾文史工作室 (地元ボランティア)	社長	李 志仁氏
	同 上	副社長	呉 春和氏
	同 上	映像ドキュメント製作	紀 栄達氏
	淡江大学建築学系	講師	黄 瑞茂氏

1999年5月12日午後4時頃、淡水公民館図書室で滬尾文史工作室責任者(地元出身のボランティア)数名より、淡水鎮をめぐる地域開発の動向(発展史や建設中の淡海ニュータウンの問題点)および環境保存の矛盾に関する

注1) インターシティ研究会は、1985年に故塩見譲(元和歌山大学教授・日本経済新聞編集委員)を中心として設立された。設立趣意書のとおり目的は、自主的な都市研究と、海外都市との情報交換の会である。現在、正会員・研究会員77名と賛助会員1名が在る。これまで、都市のあり方やまちづくりに関する会員の識見を、フォーラムやワークショップを通じて刺激し合い、その論点を書物でまとめて出版してきた。たとえば、『都市ストックを創る——豊かな都市の条件——』(1992年、学芸出版社、以下同)、『あそびが都市をつくる——ひと・まち・ライフスタイル——』(1995年)、『駅とまちづくり——ひと・まち・暮らしをつなぐ——』(1997年)の出版物がある。

2) 考察グループのメンバーは、大野木忠男(モリタ建設株式会社取締役)、柿原一郎(柿原事務所主宰)、川渕吉男(元日本経済新聞大阪本社編集委員)、間健治(間健治建築工房主宰)、中筋修(株式会社ヘキサ建設コンサルタント取締役社長)、松本隆平(株式会社関西総合研究所専務取締役、インターシティ研究会事務局秘書を兼任)、及び奥野志偉(徳山大学教授)である。役職はいずれも当時のものである。スタディツアーのスケジュールとして、5月12日~17日(5泊6日)で、台北3泊、台南1泊、高雄1泊の予定であった。

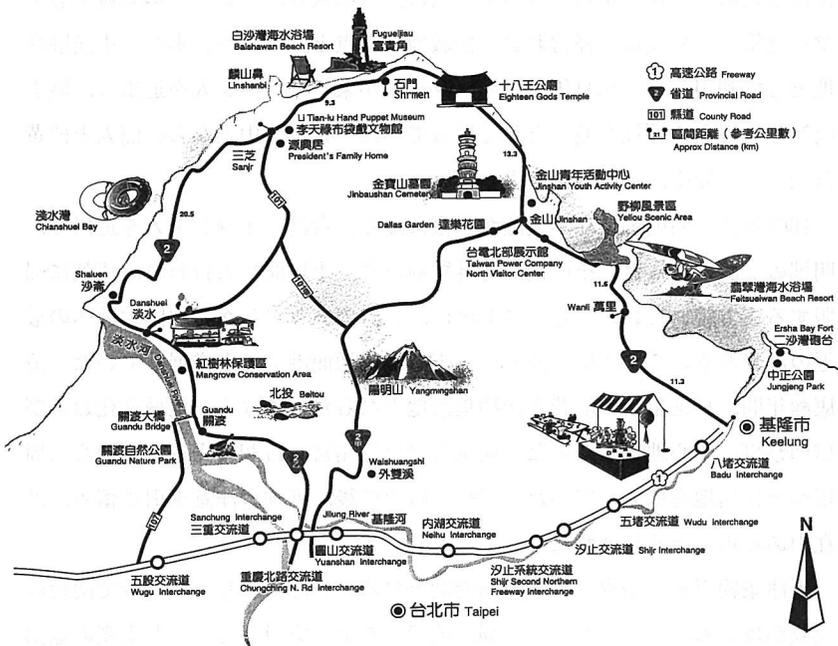
スライドの報告を頂き、後に夕陽の下で、淡水の旧市街地およびレクリエーション・ウォーターフロントー帯を散策し、李志仁氏・黄瑞茂氏の2者の親切な案内を受けた。

(1) 地理的位置・地名の由来

淡水は、台北市の衛星都市として、淡水河の北岸に位置する(図1)。台湾の最大の都市圏ー台北に近いので、都市化に伴ない地域の自己アイデンティティが喪失された。

1644年には淡水で、原住民集落の地で中国本土よりきた移民が漢民族の村落をつくったという。「淡水」とは、古代以来淡水河口および淡水港の総称

図1 台湾北海岸における美しい風景の場所及び路線図



出所：中华民国交通部觀光局「淡水北海岸」1998年パンフレット

であるか、もしくは台湾北部の全体であると使われていた。しかし、「滬尾(ヤップウェイ)」は、当時の村落名であった。日本占拠の時、正式に「淡水」を使用しはじめ、現在までいたる。ただ、日本時代の淡水郡が、現在の三芝、石門、八里等の郷鎮まで広い範囲を含めていた。

「滬尾」の語源は、一説によれば原住民による現地名の呼び方であり、一説によれば《台湾府志》に記載されるように「碎石を用いて海より埋立てることが【滬】であり、漁獵牧畜の集落があるので、この集落の尾に立地することは【滬尾】である」という。

## (2) まちの発展史

16世紀には、まずヨーロッパの覇権国家が東南アジア、東アジアへ勢力を伸ばし始めた。1629年秋、スペイン人は淡水に入り、サンドミニコ城や教会堂を建築し、植民地の経営および伝教地の拠点と、中国や日本への中途駐在地として利用した。1641年に、オランダ人が来てスペイン人を追出し、城を改築して現在の「紅毛城」として残っていた。また、中国からの商人と硫黄(いおう)、鹿皮、土産等を商売していた。

1661年に、明朝鄭成功が大陸から東に渡り、台湾のオランダ人を追出し、明鄭の支配に入った。その後、海外貿易以外、土地開墾も行われ、清朝に帰服するまで続いていた。さらに滬尾は、良港であり、しかも中国大陸への最近の港であるので、次第に漁村から市街地と通商港湾へと発展していた。清康熙年間、日常生活の消費と産物集散地となるだけでなく、地域文化および信仰祭事の中心地ともなった。淡水町民は福祐宮(1732年完成)を中心に周辺へと住居地を拡大していた。アヘン戦争の後、列強の注意を引き留め、潜在力ある市場とみなされた。

天津条約以後、淡水は国際通商港湾となる。1862年より、この港で関税の徴収がはじめられた。お茶、樟脳、硫黄、石炭、染料等といった土産の輸出のほかに、アヘンや日常用品等が輸入された。外国商人は、貿易事務所を設けるほか、イギリス人は紅毛城内で領事館を設立した。マックイ博士(カナ

ダ国籍、当時28歳）は、1872年に淡水に到着し、このまちを伝教、医療および教育の拠点として大いに活躍した。彼は台湾の早期対外思想の開通に貢献し、町民の啓蒙に大きく寄与した。彼に関係する淡水禮拜堂、医療所、旧住宅、図書館、銅像、墓地の旧跡がビジターの関心を呼んでいる（図2）。

1895~1945年間の日本占拠時代には、淡水はいわゆる黄金時代を過ぎたが、河床が徐々に沈積物の堆積によって浅くなり、大型船舶の通航に不便になった。日本人当事者が、基隆港の潜在力に注目し、同港湾の開発に力を注いだ。まもなく、台北・基隆間鉄道は開通され、これによって淡水の地位が基隆港に取り代わられた。しかしながら、日本人当事者は現地埠頭施設の強化や、港

図2 淡水にあるマックイ博士の旧住宅及び周辺の名勝旧跡



湾改造の計画(図3)もあるが、しかし淡水の衰退一途を救うことができなかった。後に淡水の経済は農林業の台湾内陸へ向けるようになった。当時日本政府は、インフラストラクチャー(台北・淡水鉄道、水道、埠頭建設、政府支庁、郵便局など)に投資し、淡水を周辺一帯の郷鎮の行政・文化の拠点に指定していた。現在台湾政府の総統李登輝氏が通っていた小学校、中学校もなお残っている。

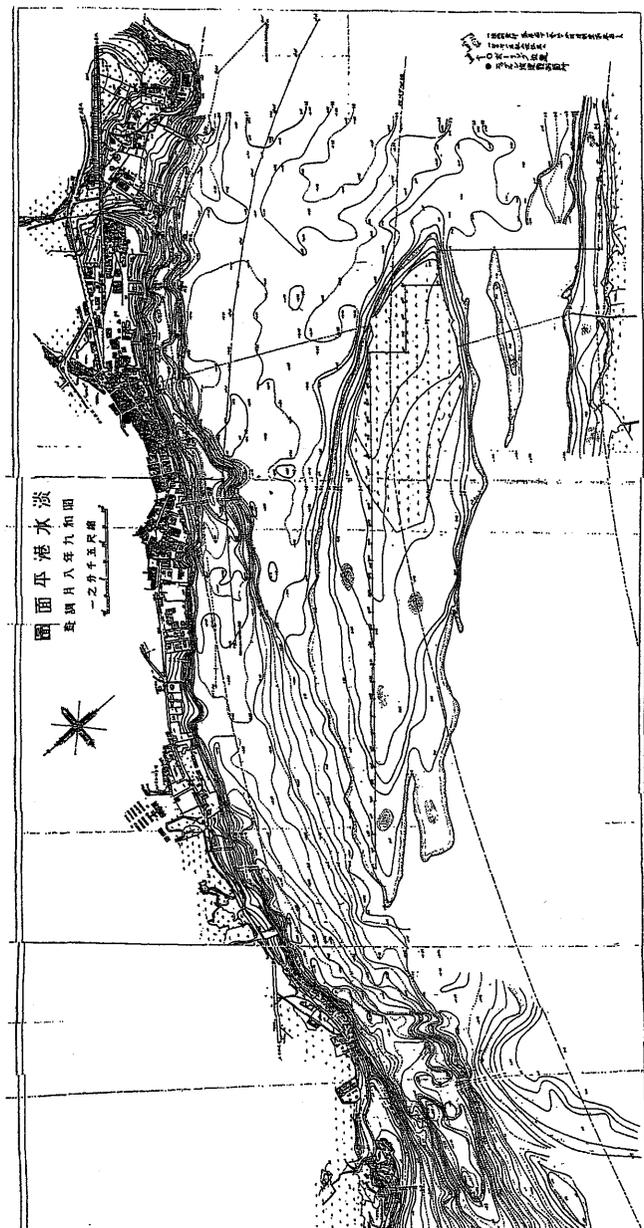
戦後、淡水は小漁港へと淪落した。台北大都市圏の形成発展につれて、淡水の産業と社会が変化を迎えた。大学の新設により大学生数が増加し、かつ、北海岸の観光レクリエーションの拠点として生き返るチャンスが与えられている。新設した登輝大道の両側に新しい居住区が造られ、河岸と中正路の沿いに食事・休憩・レクリエーションの機能を備えた施設が増えた。郊外の開発は、景観ビル、山麓の高級住宅ビル群、たとえば、海景楼、オクスフォード(中国名 牛津)大学城、宏国海天、新天母大厦などが林立している。観光飲食店も多数ある。

最近十年、不動産の投資熱が、人文環境および自然環境へと構造的な変化をもたらした。たとえば、過度の都市開発によって都市景観の悪化につながり、また大量の外来人口によって公共施設の不足及び生活質の悪化につながるものが残念である。将来、「大台北都市圏 MRT」大衆運輸システムの淡水線の導入、「淡海新市鎮」の完成(全3期の計画人口は30万人)によって淡水に新たな影響をもたらすことについて、淡水行政の見通しは楽観である。MRTの開通によって台北駅から淡水までの23キロ間が40分で結ばれている(図4)。

### (3) コミュニティづくりについて

淡江大学林盛豊・黄瑞茂(1997)の論文によると、台湾における「社区発展」の経緯は、地方文化や郷土意識の高まりの現在、常に経済発展と正面衝突している。地方住民の意識が高まり、その先導事例として宜蘭県の「噶瑪蘭」、新竹の「新竹街」、台北県淡水の「滬尾街」などがある。プラナーも、

図3 水深を示す1935年淡水港の平面図（昭和9年8月調査）



出所：專業者都市改革組織・淡水社区工作室『淡水河岸遊憩規画』1994年 p. 27

図 4 新設した台北市地下鉄 (Mass Rapid Transit) 淡水線



出所：中華民國交通部觀光局「淡水北海岸」1998年パンフレット

advocacy planning を提唱し、自ら住民の価値観を導入して、住民の切望するまちづくりの方向へ助言していく。論文の最後に、まちづくりのタイプが大別して5種類あると結び付ける。すなわち、

- ① 環境問題の闘争で結盟したコミュニティ
- ② 住民参加でコミュニティ環境を改善するコミュニティ
- ③ 都市の歴史保存および文化再建の集落
- ④ 農漁村地方産業と文化を再建するコミュニティ
- ⑤ 伝統的な地方の生活空間をつくるコミュニティ

といったものである。

上記の③に関しては、台北市迪化街（1988）、台北県九価集落（1988）、澎湖県中央里（1991）、澎湖県二崁村（1991）、台北県淡水老街（1993）、桃園県大溪老街（1995）の事例がある。ただし、これまでのコミュニティづくりの経過は、どちらかというと、政治民主化過程の空間的具現というよりも、周辺性を持ち、福祉構造や社会的補償の本質であり、ゆえにコミュニティづくりの動員がすべて自発なことではないという。

淡水では、1993年2月に都市計画・建築の専門家たちを含めたコミュニティづくり・行動チーム（Community Action Team）が成立される。このチームの目的は、淡水地域の環境問題の対応や解決に支援し、市民とともに、専門家の知識を実践するのである。

#### (4) 再生戦略への市民参加

急速な都市化・開発潮流の文化によって旧文化や旧市街地が大いに影響されているのは淡水だけでなく、他の多くのまち・地域も同様な矛盾に直面している。不幸なことに、ほとんどの町は、この問題を処理する専門経験の不足や支援の不在により、なお問題嚴重性を理解していないようである。この問題を解決するため、新しい都市計画の組織およびコミュニティづくりの専門団体が成立しなければならない。地元のコミュニティが行動主体となるべきであろう。前衛的な都市計画専門家の立場に立ってみれば、都市改造プロジェクトは、物理的整理だけでなく、同時に社会改造およびコミュニティ創造でもあろうということである。

#### (5) 淡水河岸辺遊憩計画

1993年3月に都市計画専業者（専門家）都市改革組織・淡水コミュニティ工作室が、淡水鎮公所の委託を受けて、淡水河岸辺遊憩計画案の策定を作業し始めた。事業のプロセスは、基本調査、全体分析および計画構想（交通路網、活動と関連施設）、実質的空間設計（コミュニティ公園、廟埕及び市場、尿礮渡頭、公明街河岸、MRT公園、松涛夕陽広場の6カ所）、整理総合を経

て河岸レクリエーション計画設計、再び実質的空間設計（鼻仔頭自然公園及び国際コンベンションセンター、漁港遊戯水空間、中正路市街発展構想の3カ所を加え、併せて9カ所）、そして最終段階の成果報告（1994年7月）に至る。特徴として、住民参加の機会が計画案の策定過程の中で、多く取入れられており、たとえば、最初にコミュニティ訪問による現状問題の発現、住民や婦女を取入れた市街地中正路の発展に関する討論会、露店や屋台店の商人を取入れた福祐宮前市場の建替えの討論会、児童による遊戯空間の発現及びコミュニティ公園設計への参加、また1993年10月24日に計画案の中間報告内容の展示、河辺で淡水をテーマとした絵展や写真展、リサイクル品の交換やセール、文芸出演及び生活を中心とするまちづくりのあり方の提案を包括していた地域文化フェスティバルの主催等が挙げられる。計画の要旨は以下のとおりである。

淡水河岸遊憩計画の任務は、関渡－油車口間の遊覧休憩の発展可能性を明示し、主な目的は、線上の観光資源を連繋する岸辺自転車専用道路を建設することである。

「計画地域の地形、歴史、生態、交通、景観、活動等の分析を通じて、この淡水河の一段は、淡水河と観音山を縦覧しえるし、オーク樹林や広い岸辺湿地を包容し、滬尾古鎮の累積してきた豊かな歴史文化遺産を有するので、都市観光レクリエーション開発にとって無限の潜在力をもっている。同時に近年この淡水地域が、台北大都市圏の発展に取込まれて様々な課題に直面している。すなわち、

- ① 都市経済と都市空間における変化によって、歴史街区が衰退一途を辿る。
- ② 都市人口が急速に増加したが公共施設やサービスは現有のままであり、サービスの質は悪化している。
- ③ 急速な郊外開発及び旧市街地の再開発によって、都市歴史空間の破壊だけではなく、郊外の生態環境までも破壊されてしまった。
- ④ 人口激増や都会観光の快速な発展のため、道路の負荷を超え、嚴重な

渋滞及び違法駐車が生じた。

⑤ 現有の観光活動は、非計画で分散しており、エコツーリズムや文化観光の積極的な作用を発揮することができない。さらに、ビジターの短時間来訪により、経済効果をもたらさないだけでなく、破壊性の効果につながることもさえないかもしれない。

⑥ 計画過程のなかで、淡水の伝統あるコミュニティが解体に直面すると、私たちは発現した。多くの市民は、都市建設に関して多くの意見があるが、発表するところがなくて、強い無力感をもち、かつ、地域アイデンティティへの帰属が薄らいでいた。

私たちは、以上の課題に直面して、以下の原則を採用している。すなわち、

① この計画はレクリエーション計画だけでなく、淡水地域の生態景観と文化再建の行動として認識している。

② 河岸边レクリエーションの開発は、都市生活の向上や、経済振興につながるべきであり、コミュニティの破壊につながるものではない。

③ 観光客の乗用車利用を減少させるため、多元の公共交通手段、歩行及び自転車による観光を開発するべきである。

④ 現在の低レベルの観光形態から、文化・生態を学習する観光形態へと入れ替わるべきである。

⑤ 将来の発展過程のなかで、大いに市民参加の促進によって、コミュニティの共同認識を深め、人間関係を再構築すべきである。

前述の計画原則に従って、私たちは、河岸边を4つのレクリエーション区段に分け、異なった機能をもたらし、様々なレクリエーション活動を導入し、自転車道をつなぐ手段として利用する。4区段とは、すなわち、

竹圍段：河岸レクリエーション帯東側の入口、水上レクリエーション区

オーク樹林段：オーク樹林及び湿地自然エコツーリズム

市街地段：歴史文化の観光

油車口段：近海のレクリエーション

といったものである。

自転車道以外に、陸上ではマス運輸システム淡水線があり、水上では地区のまたはより広い範囲を収める地域的なフェリー・サービスを開設することができる。また、各区段は、様々なサービス施設を投入する（図5）。すなわち、

#### ① 関渡ヨット埠頭の開発構想

関渡橋一帯の河水が比較的深く、また河口を離れて立地するので、ヨット埠頭と駐車場の導入、河岸レクリエーション帯の東側の入口として整備するのを提案する。

#### ② 鼻仔頭自然公園計画の構想

現有の地形をベースにしてさらに緑化に力を注ぎ、多くの原生植物生態群を加えることによって、この地を淡水河口の原生自然公園として整備する。現有の歴史的建築を保留し、再利用する。特に、水上空港、シェル石油庫、ジャーディン社及び平埔族<sup>ピンブ</sup>の遺跡を、水上空港、埠頭、飲食施設、地方史料博物館、キャンプサイト、国民宿舎、オープンエア遺跡博物館及び国際コンベンション・センターとして活用していく。

#### ③ MRT 公園の整備構想

MRT 駅の周囲を、公園の緑のテーマとして整備し、淡水の創意として具現する。緑化に力を注ぎ、広場をもって MRT へ出入りする人の流れを吸収するとともに、公明街、中正路及び河沿いの歩道へと接続させ、迅速に人の流れを淡水市街地まで順調に誘導する。

#### ④ 公明街及び北港塘河岸辺の整備構想

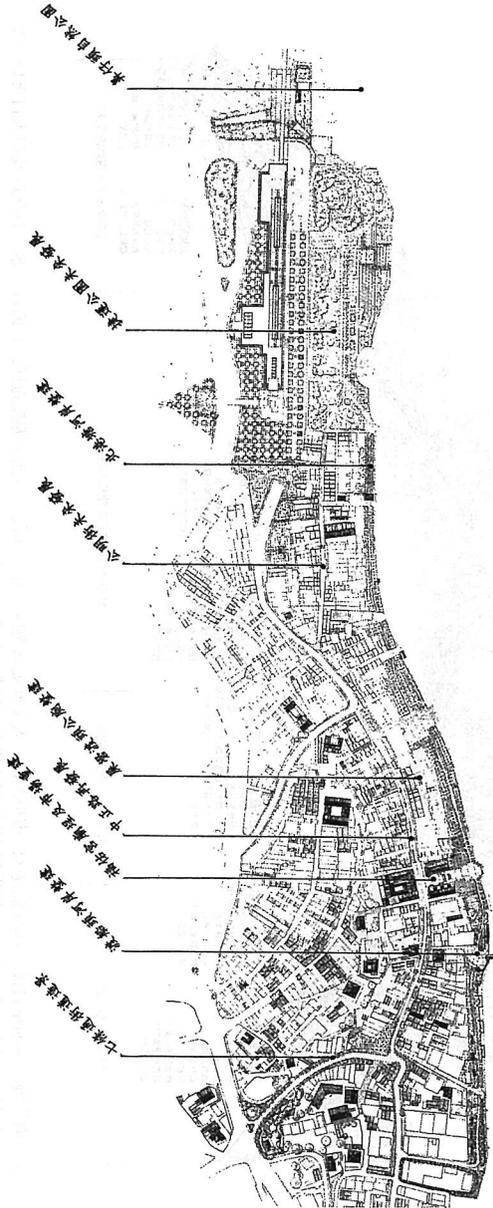
北港塘河岸辺は河岸散歩道として整備する。河岸設計は、小さな埠頭・船舶修理施設・漁具納入庫等の漁用設備を加えることによって、漁業と観光業の結合を可能にする。公明街と炭仔脚では、自転車駅、観光情報サービス、民宿、旅館、レストラン等の開発を薦める。

#### ⑤ 屎譽渡頭公衆便所の整備構想

考古時期断層のコンセプトをもってこの歴史的な場所を整備する。すなわち、子供時代のお茶碗、清時代の花瓶、瓦の破片、淡水魚化石及びラムネのボトルを用いてモザイクある地面を舗装することによって、ビ



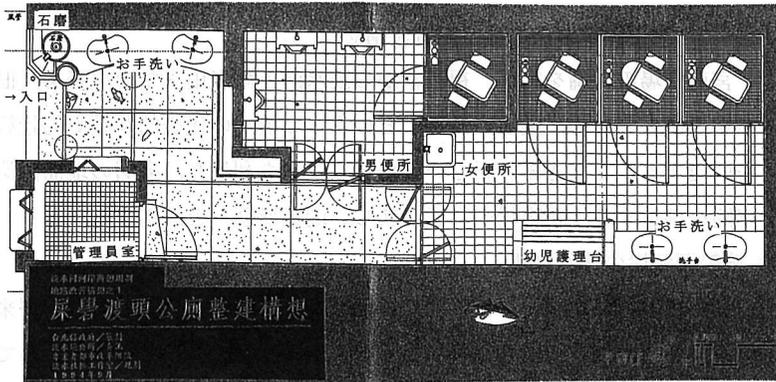
図 6 市街地発展の構想



注：淡水市街地発展の構想には，“七条通り”街並みの整備，渡船頭フェリー埠頭の整備，福祐宮前広場の整備及び市場の建替え，中正路の再開発，尿魯渡頭前公衆便所の建替え，公明街将来発展構想，北港埠頭の整備，MRT公園の将来発展構想，鼻仔頭自然公園の整備との9つの項目が含まれる。

出所：同上 p. 104

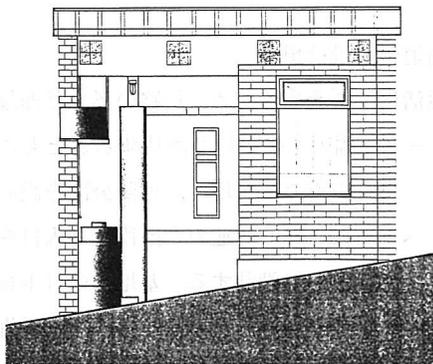
図7 (a) 淡江大学建築学系の設計による埠頭前公衆便所のデザイン



注：入口は左からである。狭い空間のなかで男性便所および女性便所が間取りされている。入口の水流しの石磨もおしゃれな設計である。指導者は黄瑞茂氏である。

出所：専業者都市改革組織・淡水社区工作室『尿磨渡頭公廁所整建構想』1994年 p. 12~13

(b) 同公衆便所入口の立面



出所：前掲 p. 15

ジターの関心を時間の長流へと導いていく。このように黒砂質の道路に埋めた断片が、河の中に埋蔵された歴史的遺物と同様に、偶然に発見されて、その瞬間、先人の記憶が甦る。

⑥ 福祐宮廟埜の整備及市場の建替え構想

宮前広場の整備を行い、福祐宮から淡水河と観音山までの視野を、旧市場の撤去のため、実現できることによって淡水の代表的な歴史的景観を回復することができる。新しい市場は、縦差を利用し、多層の地面商業空間を創造する。新市場の形態も新しい商業形態へと適用する。

⑦ 渡船頭河岸の整備構想

渡船頭河岸の再開発によって、埠頭、コミュニティ公園を造る。将来の渡船頭では、露天屋台地区、親水空間を設置し、岸辺で林蔭帯として整備し、新しい都市景観を提供する。

⑧ 中正路市街地の再開発構想

交通問題を減少するため、まず、短期的には中正路の交通を西向きの一方通行と改め、現在のバスは中山路を通行させる。長期的には時間限定の歩行者天国、道路の形、路面舗装、公共施設、ストリート・ファニーチャー、ファサード、看板、ごみ処理等を改善して高質の商業空間を創造する。

⑨ “七条通り” 街道の造景構想

七条通りの生活街道を改めるため、道路の形、路面舗装、植栽を新たに設計し、6メートル幅の2線車道を維持するとともに、歩道・歩道樹を導入する。さらに、街道の公有地で、近隣公園を設置する。この公園は三民街の周辺へと接続させ、一連の台階段及び入口を造り、底端の台階段をアウトドア劇場として設計する。基地内の日本宿舎を老人茶館として修繕し利用する。中正路マッカイ街の交差に、「曲手」の路湾を回復し、中正路の入口と端景として整備する。中山路角にある公有地を開発する際、一部の空間を街角広場として保留し、新しい都市空間を創造する。

### ⑩ 油車口における夕陽松涛広場の設計構想

内城岸の遺跡を大事に保存するとともに、観音山及び淡水河の景観を眺める「松涛落日」の景色を再造し、歴史的意義の場所を具現する。他に、この河岸段で眺望台、林蔭道、駐車場、食店、地域的なフェリー埠頭を設け、新しい親水空間を創造する。

### ⑪ 清仏戦争記念公園の計画構想

緑帯より西へ進むと、中仏の旧戦場の跡地であるので、駐車場の全体計画と配合し、中仏戦争記念公園として整備する。ここは、自転車レクリエーションの西側起点として、自転車レンタル、駐車及び観光情報サービスを提供する。ゆえに、中仏戦争記念公園、駐車場、オートキャンプ場、自転車休憩駅、飲食施設、飲料水施設、便所、金針木耳林、フェリー埠頭及び観光情報台を提供する。

## II 桃園県大溪鎮 —— 高揚する町の文化及びプライド ——

訪問先 財団法人<sup>ダシジエンダカハン</sup>大溪鎮大料坂文教基金会 理事 林 怡岑女史  
大溪鎮歴史街坊再造協会 総幹事 黄 嘉倚女史

1999年5月14日午後、三峡鎮に寄って大溪鎮のまちづくり組織を訪問した。三峡鎮は、1992年に歴史保存街道との指定を受けたが、まちの経済発展が縛られることを恐れ、住民が反対運動に走った。10キロより南の大溪鎮の場合、まちづくりをめぐる住民・行政・学者の3者が精力一杯尽くし、まち活性化における住民参加事例の1つの典型となった。大溪鎮の位置は、台北市心より南西の方向へ車で約90分の距離にある（図8）。

### (1) 地名の由来

・大溪鎮は、最初原住民山地康雅族によって「大姑陷（タカハン）」と呼ばれ、大水の意味のようであった。その後、清乾隆年間に、福建省漳州人が川



沿いに廻り、山林を開墾して住み処をつくった。次第に、漢族と山地族が混住する小集落が形成した。このため、地名は同音の「大姑崁」へ変更された。また、科挙制度のなかでの挙人も出た。その後、地名は縁起のよい意味に「大崙崁溪」となった。日本占拠時代に、「大溪」と簡素化された。また、街道計画が導入され、商店はすべて、バロック様式のファサードを建築しようとし、店舗が道端より3メートルほど奥へ下げることが規制となり、現在の町並みを形成した。当時、繁盛時期でもあり、看板づくりに優良な木材を使用したうえ、鳥獣花草模様の彫刻をも入れていた。後に、地名は「大漢溪」と変えられた(図9)。民国39(1950)年より、行政区域体制の改編により、再び桃園県大溪鎮となり、現在に至る。

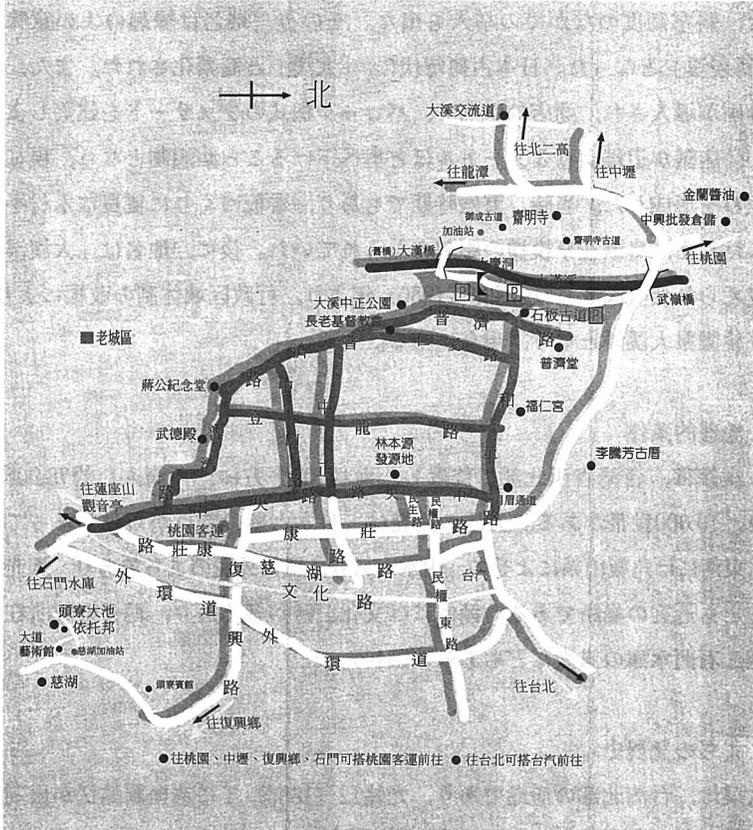
## (2) 地理的条件

・大溪鎮は、台湾省西北部に位置し、面積105平方キロ、戸籍人口約78,000人余り、19,000世帯がある。大溪の開発は、日本占拠の時点からはじまっていた。東南には角板山系によせて、山水があり、風景秀麗のまちであり、観光・居住とも適宜の場所である。鎮内には文化旧跡が多くあり、蒋介石陵所在の慈湖、石門水庫の風光などもある(図10)。

## (3) まちの発展史

・大溪は、台湾北部の河港であり、光緒12(1886)年に巡撫劉銘伝が山間地で大規模開発事業を始め、北路撫墾局を設けた。4年後に、北路硫黄・樟腦専売局を新設し、樟腦事業を復興させたという。大溪は、後に周辺山区のお茶、樟腦、木材のような特産の集散地となった。光緒18~23(1892~97)年間、大崙崁が水運の黄金時代を迎えた。帆船は淡水より、大稻埕(迪化街一帯)、万華(艋舺)、新莊を經由し、この山城大崙崁まで運行した。当時、この地で商号を開いたのは、地元業者のほかに、イギリス人、スペイン人、華僑、台北の大商家等が現われ、400家近く揃えたようである。商店は、川沿いの埠頭の近くに集中し、すなわち、現在の和平路両側であった。1930年以

図9 大溪鎮の風景点



注：旧市街地（老城区）には、中央路にある林本源發源地，和平路にある福仁宮，普濟路にある普濟堂，石板古道，長老基督教会，蔣公紀念堂などが大溪鎮の風景点ある。

出所：大溪鎮歴史街坊改造協会「發現 大溪之美」パンフレット

後、淡水の水運は河沖積によって通航不便になり、次第に衰退した。繁栄期の後、打鉄店、布莊、木器行などしか残っていない。

・大溪鎮の歴史上には、李金興と林本源の両家族が、このまちの発展に大き



な業績を与えた。李家の舟隊は、大溪と万華、淡水との間を往還し、大量の地元生産の樟腦、お茶、木材を運び出し、また米や塩をはじめとする大量の生活用品を運び入れた。他方、同治4年に、李家の李騰芳が科挙に参加し、挙人に合格できた。

•大溪の木材神卓づくりは、材料選択が厳しく、工芸が精細し、神卓および家具生産地として全台湾中に名前がいきわたっていた。水運興隆の時代に、中国本土から家具工芸をもつ工匠数名が来られ、技術作法を伝えていたようだ。また、大溪上流にある角板山等で楠木や、桧木の貴重な木材が伐採され、河流に乗ってこの地で集中されていた。さらにこの町の漆器生産も徐々に成長した。木工では地元より何人かの有名な工匠が現れた。1960年代には台湾経済が高成長に入り、神卓および家具の需要が大きく、和平老街の繁栄につながった。1980年代末に、島内の良質な木材が長期的な伐採および水土の流失により徐々に減少する。また、東南アジアより輸入してきた黒檀木、紫檀木、チークなどが優質の木材に取って代わった。この際、大溪の業者は、より一層高級の紅木家具の開発を図っている。和平路だけでも14社、周辺に19社の木材家具店が揃っている。

#### (4) 特産品

現地の特産は、「武嶺茶」と名づけたお茶、タケノコ、しいたけ、石炭、蘭、野菜などがあり、適切な季節に、みかんを中心とする観光農園も催されている。ほかに干し豆腐、サツマイモ餅といった食品加工もある。

#### (5) 歴史街坊再造協会とそのまち改造戦略

•歴史街坊再造協会の住所は、大溪鎮和平路48号にある。建築様式は、奥行き長い街屋である（絵葉書A）。当協会は桃園県政府鎮級民間シンクタンク団体であり、大溪鎮全体を代表する団体である。協会の組織は、理事長をはじめ、常務理事、理事、常務監事、監事、総幹事、財務、執行秘書より形成され、うち総幹事および執行秘書は職員である。

・再造協会の黄嘉倚総幹事による現段階の仕事目標にはハードおよびソフトの2側面がある。すなわち、

- ① ハードウェアづくりでは、すなわち、和平路の美化工事であり、1998年2月15日に開始され、400日かかる予定である。工事内容は、アーケードの再建、電線地下化、ファサードの修繕である。
- ② ソフトウェアづくりでは、コミュニティづくりとして、互いに関心を持つと、共同認識を深めようとする、環境の改善、生活の教育、伝統技術の伝承、ビジネス機会の再生、文化的アイデンティティの引続き等といったことである。

#### (6) 「文化立鎮」と関連活動

・大溪鎮では、鎮民の日々文化に関する需要が高めてきたこととともに、行政区文化建設委員会のコミュニティ（社区）づくり政策と結んで、創意をもつ学者や専門家の参入を受けて、大溪鎮公所は、一方、旧市街地の再開発機会の可能性すべてを把握しようとし、他方、民間から自発的な情熱を引出す役割を演じようとする。過去3年では、「大崙塚文化促進委員会」が、大溪文化のエンジンとして働く「大崙塚文教基金会」の創立を導いた。また「大溪草店尾工作室」と和平老街の歴史・人文・産業の総合的まちづくりを図る「歴史街坊再造協会」とは、「新南街厝辺連誼会」を主体として、もう一本の旧市街道（中山路）の住民と、共同なアイデンティティを認めることに至った。中山路の住民も活性化の必要性を認識し、旧街屋倒壊の危機を乗り越えようとし、再発展のチャンスを掴むため、中山路一帯の画廊や工芸工房の資源を生かし、大溪の文芸区となるよう提案している（絵葉書B）。

・最近1998年2月15日～21日の旧正月前後の期間中、全国文芸祭に参加し、西遊記に似ている「溪遊記」の愛称をつけ、次の7つの小テーマ下で、一連の大規模な活動を主催した。すなわち、

- ① 人に親しい木器：家具博覧会、木器づくり工匠賞、「宝刀未老」老工具展、木器DIY（Do-it-yourself）競争、木器の日など

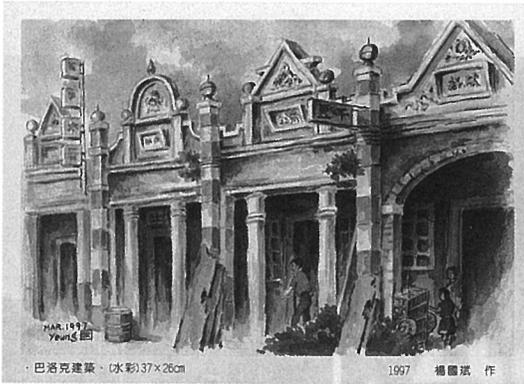
- ② 美食の享受：特色ある美食会，美食弁当，スナック店の宣伝，美食の日など
- ③ 人に親しい歴史：7つの古道の歩行，古建築群や岸辺景色の溪遊記，歴史回顧展（茨津吟社主催），写真展，石炭鉱展，林本源家展，李金興古屋，福仁宮，歴史日など
- ④ 人に親しい自然：Discover 大溪，野蛮ゲーム，エコツアー，大溪新八景の選挙，歴史の日など
- ⑤ 人に親しい文芸：中山路街屋文芸区内「行風画室」，都市計画更新館，児童美術館，中古品のバーゲンセール，陳振科画室，吉美芸術品テーマ館，陳正雄木彫テーマ館などの展示，廃物の再利用，金蘭醤油テーマ館，鉄工テーマ館，四季茶芸テーマ館，螺旋テーマ館，万成収蔵家テーマ館，歴史文化資源と地方再発展のシンポジウム，文芸日など
- ⑥ 人に親しいコミュニティ：歴史街坊再造展，28店の木製紹介表示の開幕儀式，共同購入を始めた竜潭コミュニティ，老街露天音楽会，家庭の日，歴史街坊の日など
- ⑦ 故郷の呼び声：老中青年年齢出身者の里帰り及びUターンの呼びかけがある。その他，スタンプ収集も行われた。

こうした「21世紀文化大嵯崧」の活動が，将来都市発展の主脈へとつないでいくであろうと，期待されている。

#### 〔付記〕

研究調査に当たってお世話になった方々にお礼を申し上げたい。特に台湾国立中興大学公共政策研究所 陳益宜教授，財団法人樂山文教基金会執行長 丘如華氏及び江美誼氏，通訳を勤めた建築士 張瑜氏，淡水鎮滬尾文史工作室社長 李志仁氏，副社長 吳春和氏，スライド製作 紀榮達氏，淡江大学建築学部講師 黃瑞茂氏，桃園県大溪鎮大嵯崧文教基金会理事 林怡岑氏，歴史街坊再造教会総幹事 黃嘉倚氏，行風画室主宰 楊国斌氏，株式会社なむ環境創造代表取締役 宮本孝二郎氏の方々に感謝の意を表したい。

なお，当研究調査の他の写真は，<http://chaos.tokuyama-u.ac.jp/okuno/>のホームページに載せてあるので，参照されたい。



楊国斌氏画の絵葉書

A：百年前に商家が林立する和平老街。バロック風の建築様式のファサードである。1997年作。



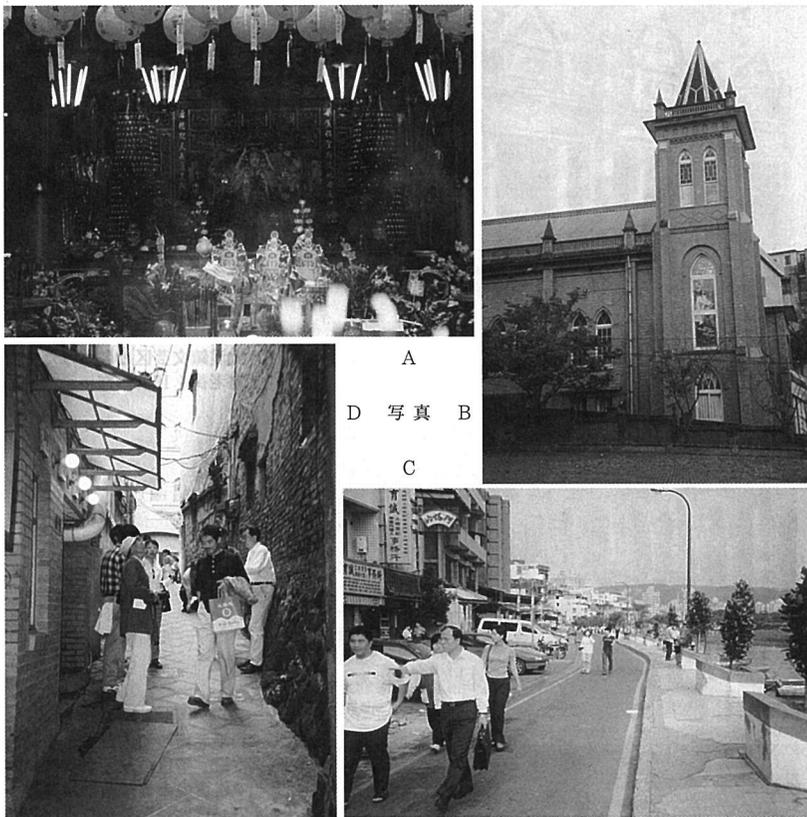
B：大溪鎮文芸区と名づけた中山路老街，1998年作。



C：和平老街の河入口である碼頭古道。階段の段差が少ないので建造のときに荷物運び者への心遣いが感じられる。1996年作。

注：画家の楊国斌氏は1936年に大溪鎮で生まれ、1955年に台北師範芸術科卒。1968年国立芸術専門学校西洋画卒。70年代後半には米国に留学した。帰国して行風画室を開設し、経営者をつとめる。専門は油絵，版絵，水彩絵葉書。

出所：楊国斌「大溪水彩風景明信片（C組）」行風画室出版 1998年。



A

D 写真 B

C

A 旧市街地中正路にある福祐宮（媽祖廟）であり、1796年に完成された。祭られている媽祖は、中国沿海住民漁民の信奉する女神であり、海上運航の無事息災に効くらしい。淡水市街地がこの地を中心にして拡大してきた。廟内の柱には、「徳配昊天宇宙若，功崇慈母慶安瀾」「安波瀾脈分諸島，新廟宇靈庇淡山」と、媽祖を賛美する2対聯が書かれている。

B 長老教会の淡水禮拜堂

C 一部の整備が完了した淡水河岸遊覧休憩の空間。左から商店・レストラン、道路、舗装歩道、花壇、河流・港。週日の午後にも夕陽の頃、観光客が見学に来る。

D 淡江大学建築学部が設計した埠頭前公衆便所。その入口が写真に写った小道の左側にある。一番右が同学部の教員 黄瑞茂氏である。

## 参 考 文 献

### <一般>

- 郭 中瑞・堀込憲二『中国人の街づくり』相模選書 1992年  
楽山文化基金会『第6回亞洲西太平洋都市保存連盟國際研討會論文集』&『ワークショップ ハンドブック』1997年11月23~24日 台北・金門・高雄  
若林正文・劉進慶・松永正義編著『台湾百科』大修館 1990年

### <淡水>

- 林盛豊・黄瑞茂「台湾のまちづくり10年」『建築雑誌』Vol. 112, No. 1415, 1997年12号  
Huang Jui-mao, "Recovery of Townscape: a story of Tamsui." Manuscript, 1998.  
淡水鎮公所「淡水鎮 地図簡介」1997年  
中華民國交通部觀光局「淡水北海岸」1998年 パンフレット  
專業者都市改革組織・淡水社區工作室『淡水河河岸遊憩規畫』台北縣政府企画  
淡水鎮公所委託 主事陳志梧 共同主事黄瑞茂・曾旭正 1994年9月  
Ditto『尿魯渡頭公廁整建構想』地点改善構想1 1994年9月  
Ditto『福祐宮廟埕及市場重建構想』地点改善構想2 1994年9月  
Ditto『渡船頭河岸整建構想』地点改善構想3 1994年9月  
Ditto『MRT公園發展構想』地点改善構想4 1994年9月  
Ditto『紅樹林段自行車(自転車)道設計』自行車道第1期工程 1994年9月  
紀 容達「非情淡水一定海營」『滬尾街』第9期 13~18  
淡水鎮公所『金色淡水』第58期, 1999年4月; 第59期, 1999年5月  
淡水基金会『文化淡水 社區報』1999年4月  
堀込憲二「淡水河が生み育てた港町」加藤祐三編『アジアの都市と建築』鹿島出版会  
1986年 143~165

### <大溪>

- 宮本孝二郎「文化複合が生んだキッチュな街並みの保全に関する報告」奈良まちづくりセンター有志編『第6回アジア西太平洋都市保全國際會議 台湾國際フォーラム 研修旅行記』1997年 18~23  
大溪鎮大崙崁文教基金会『溪遊記導覽手冊』1998年全国文芸季・桃園県  
林宜發編『大溪風情』大溪鎮公所 1997年  
大溪鎮歷史街坊再造協會「發現大溪之美」1998年 パンフレット  
大溪鎮歷史街坊再造協會『大溪老街社區報 亭仔脚開講』4~6号 1999年2月~4月  
楊國斌「大溪景點導遊図」行風画室 1997年  
楊國斌「大溪水彩風景はがき(C)」行風画室 1998年